

おそらく耳下腺唾液分泌の誘発因子として歯根膜への刺激が有効であると思われます。

- ② 総義歯着用患者においての実験は行っていませんが、咀嚼刺激により同じ様に唾液分泌が誘発されるとの報告が過去にされております。

質 問

東城庸介（歯科薬理）

無刺激と咬合圧刺激の場合とでは分泌唾液の組成に差があるか。

回 答

星 和明（口腔生理）

今回の実験では、唾液分泌量だけを測定し、唾液成分の測定は行いませんでした。

## 6. 消毒薬の継続使用に関する検討

大熊良子，千葉智子，阪田久美子，  
高田昌彦，馬場久衛\*

（附属病院薬剤部，\*口腔細菌）

院内感染防止の手段として重要な位置を占める消毒薬の院内における使用状況を把握し、効率的な使用について検討することは病院管理上有意義である。

過去7年間の当院における消毒薬の使用動向を解析した結果、消毒薬の消費金額が年々増加の傾向にあり、昭和59年度には全医薬品購入金額の1/4を占めていることがわかった。中でも手指消毒殺菌剤ヒビスクラブの使用量と、5%ヒビテン液の使用濃度の改訂が消費金額に与える影響が大きいと考え、薬事委員会で検討し、他剤への変更を決め、消費金額の増加を抑えることができた。さらに、金属器具の消毒のために各科で繁用されている亜硝酸ナトリウム加塩化ベンザルコニウム液（N-オスパン液）の使用量の抑制のため、N-オスパン液の継続使用の可能性について細菌汚染試験を行い検討した。その結果、保存科のユニット消毒槽で使用しているN-オスパン液は、通常の使用においては5日間使用後も細菌は検出されず、MICも経日的に低下の傾向は認められたが、2日目までは変化しないことがわかった。そこで、ユニット消毒槽のN-オスパン液は2日目毎に交換することとし、同様の消毒を行っている他科でもこの結果を参考に、消毒液の継続使用を試行することとなり、N-

オスパン液の消費量は従来の1/2程度になった。

現在各科で使用中の消毒液についても同様の試験を行っているが、口腔外科、保存科の消毒液から数個の枯草菌が検出された。枯草菌は芽胞形成菌であり、芽胞は通常濃度のオスパン液には抵抗性を示すため、空气中、手指、口腔内で使用した器具等を通して混入したものが検出されたと考えられる。

枯草菌は病原性がないため院内感染の原因となることはないが、希釈消毒液の管理や器具の洗浄にも注意が必要であると考えられた。

質 問

村瀬博文（口外・Ⅱ）

オスパン液中に綿球などを入れた時の消毒効力及びその経時的变化と消毒効力について。

回 答

阪田久美子（薬剤部）

消毒薬の綿球への吸着は以前から問題とされており、ヒビテン液が綿球に吸着され、濃度が低下したため、ある種の細菌が繁殖し、これが院内感染の原因となった報告もある。そのため今回ヒビテン液の濃度も0.1%に引き上げられた。オスパンの綿球への吸着もわずかにあると報告されているので、各科で使用中の消毒薬の力価、汚染の問題について検討していきたい。

## 7. 歯科病院における医薬品情報活動の検討（Ⅰ）

### 当病院における医薬品情報活動の解析

千葉智子，大熊良子，阪田久美子，  
高田昌彦 （附属病院薬剤部）

病院薬剤師による医薬品情報活動（Drug Information Activity：DI）の目的は、医師をはじめ総ての医療従事者に医薬品に関する情報を提供し、薬物療法の適切な発

展と医療の向上に寄与することにより、薬剤師の種々の業務の中でも近年特にその重要性が強調されている。当院においても、教育病院としての重要性と歯科病院とい